

報告

医師の就労環境づくりを支援する事業 周知のための臨床研修指定病院訪問

常任理事・医療関連事業部長 藤井 美穂

本事業は、女性医師等支援相談窓口事業をできるだけ多くの医師に知ってもらうことと、これから医療の現場に飛び込んでいく若い医師たちとの懇談を目的とし、さらに仕事と家庭の両立ができる職場環境整備と医師の健康的な就労環境づくりに必要な支援事業を紹介するため、平成24年度に開始しました。

管理職、指導医、勤務医ならびに研修医の先生とお話することができ、北海道の地域医療に関する現状や、各病院の取り組みをお聞きすることができました。男性・女性に関係なく、また、医師だけではなく看護師や事務職員も責任を持って働くことができる職場環境づくりが進んでいることを実感いたしました。

平成27年度は6つの病院を訪問しましたので、各病院の様子は、訪問したコーディネーターからそれぞれ報告します。



釧路赤十字病院

[平成27年7月9日(木)]

コーディネーター 足立 柳理

釧路市の3公立病院の最後に残った釧路赤十字病院の訪問が行われました。日赤からは二瓶院長、山口、近江両副院長、青柳部長、佐藤副部長、橋本研修医が出席。釧路市医師会からは、堀口副会長が、北海道医師会からは長瀬会長、深澤副会長、藤井常任理事、道東地区の私が出席いたしました。はじめに、長瀬会長からこの事業の趣旨説明と、各病院で行われている取り組みや情報提供をいただき、その後、二瓶院長から「女性医師が今後さらに増えていくと思う。子育てと仕事の両立は、まわりの協力なくしては成り立たない。当院としてできることは協力していきたい。この機会にいろいろな意見を聞かせてほしい」とのご挨拶がありました。意見交換会での内容を要約しますと「日赤病院は、道東地域に

における周産期およびお産における中核周産期センターであり、日本産婦人科学会から総合周産期センターでは20名以上、地域中核周産期センターでは10名以上の医師を配置するようにとの通知があったが、実際には北海道においては産婦人科の医師の絶対数が足りないとの説明があり、大学の垣根をこえての派遣にはさまざまな問題がある」との意見がありました。

実際に子育てをしている医師からの意見では「院内保育に関して、院内保育の施設があるものの、年齢制限があり、民間保育所を頼るしかない」との実情が報告され、子どもを抱えて勤務する女性医師の働く環境が整えられていない現状が分かりました。

一方、病院側からは「看護師も含めて定員数や、年齢に関して、今後検討していきたい」という前向きな意見をいただきました。また、実際に勤務している医師からは、「すべての女性医師が同じ状況の仕事環境でないため、それぞれの職場環境を統一するのが難しいことや、子育て中の女性医師は三人で一人分の働きしかない」という考えをお持ちの医師もいるとのことで、「女性医師を支援するためには、その分の医師の数が必要になること、また、独身や子どものいない女性医師への負担が多くなる等、勤務している職場での医師同士の反目もあるのでは」などの意見も出されました。病院側からは北海道医師会に対して、「周囲の理解についての実態を調査し、改善策を講じてほしい」との要望も出され、短時間でしたが大変内容のある会議となりました。

大学を卒業後に都会を志向する医師の多い現実の中で、今後、地方で働く勤務医の数は年々減少してくるでしょうし、その上、地域での専門科の集約化も行われてきておりますので、女性医師単独で研修のために赴任する場合は問題ないと思いますが、結婚をして子どもさんを連れてご主人とともに赴任してくる場合には出身大学が違えばなかなかその中に入って勤務し、ましてやフレックスタイムで働くことは大変難しいといわざるを得ません。その現実を直視して医師会も病院も双方が協力しながらこの問題を改善していく必要があると考えさせられました。





日鋼記念病院

[平成27年7月17日(金)]

コーディネーター 濱松 千秋

柳谷院長、榎並副院長、横山消化器センター長、兼古科長と24歳から27歳の10名の研修医が参加し、伊藤常任理事の司会で意見交換を行った。

研修医10名の内、既婚は25歳の男性研修医1名で、他は未婚だった。希望する科目は、整形外科、乳腺外科、北大の第一外科、産婦人科、小児外科と5名が外科系志望、他は、小児科、消化器内科、循環器科、内科と5名がメジャー科志望だった。親が医師の研修医は4名だった。また、現在の研修については、特に忙しいと感じる研修医は居なかった。

仕事と子育ての両立については、親や祖父母が医師で仕事と子育てを両立しているのを見ていと述べた研修医は2名だった。

勤務医の仕事環境について、榎並副院長は自分が研修医だった時は5年目くらいで月に1、2回週末に休みがとれたと話された。横山センター長は、若い医師には結婚等でキャリアを中断させないようにしてほしいとの意見があった。これに対し、深澤副会長から、最近では医師の比率で女性医師が増えているため、勤務医の仕事環境について、病院の対応が重要であると発言があった。

日鋼記念病院の研修医はすべて20歳代で、研修医10名中既婚は1名の状態で、研修のスキルアップが第一優先と感じているように見受けられた。また、30歳代の女性医師が在職とのことだったが今回は面会出来なかったが、30歳代の医師が結婚・子育てで最も関与する年代と思われ、可能であれば、30歳から40歳代の医師との面会の機会を設ける必要が大事なのではないかと感じた病院訪問であった。



釧路孝仁会記念病院

[平成27年7月22日(水)]

コーディネーター 足立 柳理

釧路孝仁会記念病院からは齋藤孝次理事長、齋藤礼衣部長、山本不整脈診療部長、吉山、小川各研修医、北海道医師会からは長瀬会長、伊藤常任理事、私、足立が出席いたしました。

伊藤常任理事の司会進行で開会され、長瀬会長から、「現場の女性医師の生の声を聴き、医師会事業の今後の参考にさせていただきたいので忌憚のない意見をきかせていただきたい」との挨拶がありました。



齋藤理事長からは、「北海道医師会では日頃から女性医師の新しい環境づくりのため大変力をいれておられ、当院にも女性医師がおり、よりよい環境づくりのために毎日施行錯誤をしているが、今後のために環境づくり等の取り組みを伺いたい」との挨拶がありました。簡単な自己紹介の後、意見交換を行いました。この病院では齋藤礼衣先生、山本先生ともに産前産後のお休みが明けた後もすぐに職場復帰をはたされており、子どもさんの預かりや病児の際の病院の対応はどのようにしているのか私も大変興味がありました。よくよくお話しをお聞きすると孝仁会には24時間体制の託児所があり、看護師のみならず、医師の児童も引き受けていること、また、かなり保育料が安く経済的にも恵まれており、看護師は女性も男性看護師も託児所の利用が許可されており、病児であっても対応してくれること、そして緊急の預かりにおいても食事を出してくれるサービスがきちんとしていることなど、大変進んだ職場環境の整備ができていることが分かりました。この託児所は、いままでいろいろな研修指定病院を訪問しましたが、こんなに条件が整備されている託児所はないと思いました。特にこの保育所は道医とも契約しており、釧路管内の病児対応もしてくれる契約をしています。このような環境での勤務は大変恵まれていると感じました。また、二人の研修医の先生にはやはり、結婚問題も気になるようでありました。

女性医師は出会いの場が限られているため、なかなか結婚ができないという意見もあり、日本の中で、婚活事業をしている医師会があるという話もありました。

地方都市に研修医や女性医師をつなぎとめるためには、環境の整備はもちろんですが、その病院の特色や魅力をアピールすることの重要性を痛感しました。今回で釧路市における臨床研修指定病院の訪問はすべて終了しました。各病院ともに医局からの人事でかなりの数の医師が減少し、総合病院でありながら、常勤医で全科を賄うことができず、診療科の欠如や出張医で補わなければならない現実がありました。女性医師という問題以前に、男性医師もかなり疲弊している状態で、これから、新しい専門医制度に変わるといいますが、これでは、地方都市で専門医制度のための研修もできないのではないかと危惧します。地方都市の現実を訴えなければ、一段と地方の医療過疎がすすむのではないかと思う訪問でありました。



製鉄記念室蘭病院

[平成27年9月1日(火)]

コーディネーター 濱松 千秋

松木理事長、前田病院長、5名の研修医が参加し、深澤副会長の司会で意見交換を行った。

研修医5名のうち、希望する科目は3名が内科、1名が麻酔科、1名は検討中だった。現在、製鉄記念室蘭病院には1年目の研修医が5名、2年目が8名、後期研修医が5名の計18名がいて、上が下を教えるという体制ができているとのことであった。



病院訪問に参加した5名の研修医のうち、結婚していたのは男性研修医の1名だった。女性研修医からは、技術を身に付けてから結婚・出産すると復帰がしやすいのではないかという意見があった。例えば製鉄記念病院の消化器内科では、2回産休を取っている女性医師がいて、1回目は1年半産休を取って復帰し、内視鏡の技術を習得していたので内視鏡

や外来等をヘルプし、2回目も1年程度産休を取り、現在日中だけ働き、内視鏡や後輩指導をしているとのことだった。現在10名の消化器内科がいるとのことで、1年以上の産休を取ってもバックアップ体制が整っているとのことであった。ちなみに製鉄記念室蘭病院には、24時間の院内保育があるとのことだった。

臨床研修指定病院は各科の医師数が多く、産休や短時間勤務に対するバックアップ体制が整っていると思われるが、医師数の少ない中小病院でのバックアップ体制の問題、外科や内科などのメジャー科では医師数が多いが、例えば皮膚科などマイナー科では1人医長のような体制の現状も多く、勤務医の就労環境には検討して行く問題が多いと考えさせられた。



小樽協会病院

[平成27年11月4日(水)]

コーディネーター 澤田 香織

平成27年11月4日小樽協会病院にて午後4時から開催された。協会病院は小樽・後志で唯一の「地域周産期母子医療センター」に指定されている。しかし、平成27年7月より産婦人科医不足のため、現在産科が休止状態である。その中で地域に貢献してくださっている、子育て中の産婦人科医、小児科医の女性医師2名を含み16名の出席であった。

産婦人科医の先生のご主人は同じ病院の上司です。最も理解しあえる関係の中で休日夜勤当直はない。一方でご主人がそれを代替している。「妊娠出産でもギリギリまで仕事をした」しかも「出産後すぐ復帰」でも「2人目、3人目となると小さな子どもを抱えてすぐ復帰するのも大変」「キャリアを積む研修の時期と一致する場合、さらに気持ちを支えることは大変」一方で、「夜勤当直免除というのは1人前として扱われない」「迷惑をかけていると感じることもある」と伺いました。できることを一生懸命にしていれば十分社会に貢献しているといえる。仕事も家庭も大事にし、それは間違いなく相互に生きる。それは相乗効果といえる。すでに協会病院では、研修医担当医師もメンター制度、院内保育、病児保育、出産育児に関わる配慮に関心をもって取り組んでくださっていた。小児科医の先生は、すでに北海道医師会育児支援事業に登録されていた。

研修医からの医師会に入るメリットについて質問があった。道医師会、小樽市医師会両会長は、地域で研修し、地域の先生と連携しさらに医師会活動に参加することにより、地域に密着した医療を理解し地域に貢献できると強調された。

私達は若い世代の先生方とともに、私達の希望・夢、そして十分に力を発揮できる環境作りを支援していきたいと考えています。この懇談会はその取り組みの一端と言え、今回の懇談会のご参加に心から感謝申し上げます。



コーディネーター 藤根 美穂

2015年から新たにコーディネーターとして加えていただき、初めての病院訪問で大変緊張して小樽協会病院へ伺いました。当日ご一緒してくださいました皆様、大変ありがとうございました。

柿木院長先生、竹藪副院長先生のほか、お子さんをお持ちの産婦人科の女性医師、小児科の女性医師がおられ、研修医もお二人ご参加でした。私自身3人の子どもたちの幼少時に大変苦勞していたこともあり、子どもをお持ちの先生たちの日々の暮らしが一番気になってお話をお聞きしました。さまざまにご苦勞され、工夫されて過ごしている毎日のお話の中で、院内保育所まで幼稚園のバスが送迎して下さると言うお話を聞き、大変珍しいことと思い非常に感銘を受けました。当日もお話させていただきましたが、産婦人科医師は34歳以下に限ると女性医師のほうがすでに多いという状況にあります。産婦人科医師を確保するには、女性医師の仕事と生活を両立させるためのサポートをいかにするかといった視点はすでに欠かせないものとなっています。地域の妊娠出産をサポートするという点からいえば、病院としての勤務の在り方の工夫と地域としての医師の生活サポートの両方がともにあることが望ましいと思われま。小樽協会病院では病院の体制が良いことのほかに、同僚でもいっしょの夫君と業務を分担する工夫をされていっしょのことで、大変うらやましいと思われました。また、院内保育所をはじめ幼稚園のフレキシブルな協力があるということは、病院だけでなく、小樽市という地域の協力を得られているということであると思われま。院内・院外合わせてバランスの良い体制があることを感じました。

とはいえ自分の体のことはやってみないとわからないこともあり、妊娠合併症をご経験されたというお話に、自分も張り止めを飲みながら仕事していたことや、産後高熱が出て育児サポーターにお世話になったことなどを思い出していました。小児科の先生からは、ファミリーサポート・緊急サポートのサービスを利用されているというお話がありました。これは当日お話ししておりませんが、私は小樽市の緊急サポートネットワーク立ち上げ時に、サポーター養成講座の講師としてお手伝いをさせていただいたことがあります。自分が関わってきたサービス

がちゃんと利用していただけにお役に立てているということは、非常に嬉しいです。サポーターをしてくださっている方たちは、決められた時間数の講習を受け、救急実習なども受けてから活動に参加されています。講習内容には子どもの病気や救急と言った内容も含まれますので、地域で持続的にサポーターを養成するには講師をしてくださる医師の方の存在がぜひとも必要です。利用会員として子育て期にこうしたサービスを利用された先生たちも、将来もしご縁があれば、サポーター養成事業にも講師としてご協力いただけると嬉しいと思います。

研修医は皆さんよく頑張っている頭が下がります。私自身が倒れつらいつつ何とか医師を続けてきているという状況ですが、それでもここまで来られたのは育てようとしてくださる諸先輩方がいてくださるからです。小樽協会病院では竹藪副院長先生が研修医のメンタル面のサポートにまで細やかに気持ちを配ってくださっており、研修体制づくりに真摯に向き合われていることを感じました。研修医をはじめ若い先生たちには、出産育児に限らず思うように進んで行けないことがある時も、どうにもならないことは本当に稀にしか起きることはないの、信じてゆっくりでも進み続けていただければと思います。それでも困った時にはぜひ周囲の先輩たちや私たち医師会相談窓口コーディネーターにご相談いただければと思います。よろしく願いいたします。



函館中央病院

[平成27年12月11日(金)]

コーディネーター 小葉松 洋子

函館中央病院は函館の五稜郭地区に位置し、名前のとおり函館市の中心部にあるため各方面からのアクセスもよく、非常に存在感のある病院です。会の冒頭に橋本院長から、函館中央病院では医師の約20%が女性であり、長く勤務してもらえよう、平成20年に女性用の当直室を設置したこと、臨床研修制度においては、研修医から選ばれる病院をめざすべ

く、取り組んでいるとのご挨拶がありました。

本会に出席された研修医の先生からは、函館中央病院を研修先を選んだ理由として、総合病院で少人数の研修医であることがあげられていました。指導医から一人一人名前を憶えてもらえ、丁寧な指導を受けられること、また少人数の環境では、苦手なことも避けることができず強制的に対応させられるため、力がつくと考える、とのことでした。

函館中央病院では院内に保育所があり、産後の産婦人科女性医師は、搾乳ではなく、1日3回院内保育所に行って授乳を継続しているとのことで、非常に羨ましい環境だと思いました。母乳育児の母にとって、仕事復帰は授乳をどうするのか、非常に悩ましい問題ですが、直接授乳に出向くことができる職場は、極めて恵まれていると思いました。

大学医学部のない函館では、この地域で働いてくれる医師を増やすために、病院の勤務体制や待遇のみならず、保育や教育環境も非常に重要です。一人でも多くの医師に函館で快適に働いてもらうため

に、各病院の努力だけに甘えず、函館市医師会も医師の働きやすい環境作りに、もっと真剣に取り組むべきなのでは、という必要性を感じた会でした。

新幹線が来ることで、交流人口が増えるというよい効果のみならず、利便性が上がることで、函館から患者さんや医師が東北地方にストローされてしまうかもしれないリスクが潜むことを忘れてはいけません。



お知らせ

平成28年度糖尿病等生活習慣病予防のための人材育成研修会 ～特定健診・特定保健指導従事者研修～

北海道糖尿病対策推進会議、北海道、北海道健康づくり財団の主催による標記研修会を下記の内容で開催いたしますので、ご案内申し上げます。

- 目的 生活習慣病予防を推進するための人材育成として、特定健診事業の企画立案・評価の必要性と実践的な取組方法の理解、効果的な保健指導の知識・技術向上を図ることを目的としています。
- 日程 平成28年6月29日（水）9：50～17：15
6月30日（木）9：20～16：30
7月1日（金）9：20～16：30
- 場所 北海道医師会館 8階会議室（札幌市中央区大通西6丁目6）
札幌市営地下鉄「大通駅」1番出口より西へ徒歩3分
※昨年と会場が違いますので、ご注意ください。
- 受講対象 平成28年度に医療保険者より特定保健指導事業の委託が決定している受託機関に所属する医師、保健師、管理栄養士
- 受講定員 120名（全日程出席できる方）
- 申込方法 本研修会の詳細なプログラム等をご希望の場合は、4月28日（木）までに下記のお問い合わせ先までご連絡ください。
- お問い合わせ先 北海道糖尿病対策推進会議事務局（北海道医師会事業第三課内）
TEL 011-231-1726 FAX 011-241-3090 メール 3ka@m.douji.jp